

3 即位礼と大嘗祭の意義

ご承知のとおり、摂政期も含めれば、実質六十七年余の長きにわたって君臨された昭和天皇が崩御され、ただちに皇太子の明仁親王が皇位を継承された。そして、平成二年の十一月には、新天皇の即位礼と大嘗祭が盛大かつ厳粛に執りおこなわれた。今上陛下は、第百二十五代目の天皇である。百二十五代というと、単純に一代平均十数年としても、ざっと二千年に近い。およそ二千年もの長きにわたってつづいてきたことになる。

今日、世界に王政・君主制をとる国は約三十カ国（ほかにオーストラリアやカナダなどのような大英連邦の構成国が十数カ国）ある。しかしながら、千年以上つづいてる王室は、ほとんどない。たとえばイギリスでさえ、現在のウィンザー（もとハノーバー）王朝は、エリザベス女王が六代目、せいぜい三百年足らずである。他王朝との系譜上のつながりをさかのぼっても、千年を越すことはできない。

けれども、日本の皇室は、千年どころか二千年にわたってつづいてきた、まことに世界でも類をみない家柄である。その長きにわたる皇室の存在は、けっして偶然でも

なければ必然でもない。それどころか、つとに広池博士も指摘されるように、天皇が優れた道徳性を身につけてきたこと、そして多くの一般国民が、皇室と同一の祖先につながると考え、皇室を中心に日本社会を形成し維持してきたことなどの好条件が重なって、ようやく可能になったのだと考えるほかにように思われる。

この歴代天皇が代始におこなわれてきた即位礼や大嘗祭の意義については、先般こちらの研修会で講述した記録が『皇室の伝統精神と即位礼・大嘗祭』（広池学園出版部刊）に収められている。したがって、ここでは簡単にのべるにとどめたい。

まず平成二年十一月十二日の即位礼は、二つの儀式があった。まず午前中におこなわれた「賢所大前の儀」では、皇祖の天照大神をお祭りする賢所の大前で、天皇が即位を奉告された。ついで午後、内外の代表者二千数百人が参列しておこなわれた「正殿の儀」では、高御座に登られた天皇が、即位の「おことば」により、決意と理想を表明された。ここで注意すべきは、人びとの前に立たれるよりさきに、まず祖先神と仰ぐ天照大神の前に額ずかれて、即位を奉告しておられることである。

それから十日後、十一月二十二日の夜半から翌未明にかけて、特設の大嘗宮でおこなわれた大嘗祭は、天照大神をはじめ天神地祇の神々に、新しく穫れた米と粟で作られた神饌（飯・粥・酒など）を、まず天皇が親しくお供えになり、そのあとでお下

がりをみずから召し上がるという儀式である。その意味はいろいろに説かれているが、一言でいえば、いわゆる神人共食により祖孫一体となられ、歴代と同様の生命力・精神力を受け継がれるということであろうか。

ちなみに、平成三年の正月に公表された今上陛下の御製（御歌）がいくつかあり、その一つにとりわけ注目すべきものがある。

父君の新嘗まつり偲びつつ 我が大嘗の祭り行なふ

この「父君」は、申すまでもなく昭和天皇である。「新嘗まつり」は毎年十一月二十三日の夜半から翌未明にかけて、神嘉殿の中央でおこなわれている。その隣の隔殿で、皇太子殿下は成人されてから毎年ずつとお祭りに侍してこられた。その経験を踏まえて、「このたびの大嘗祭は、父君が毎年心をこめておこなってこられた新嘗祭を思い出しながら、奉仕させていただきました」と詠んでおられる。まさに歴代天皇が一貫して持ちつづけてこられた敬神崇祖の精神を、具体的な経験に基づいて端的に示されたものである。

しかしながら、百二十五代、約二千年にも及ぶ歩みは、けっして平々坦々たるものではない。ときには残念な内乱もあり、痛ましい悲劇も重ねてきた。そういう苦難を

へながら、ようやくにして皇室を中心とする日本国家が維持され、今日の平和と繁栄があるのだということを、私どもはけっして忘れてはならないであろう。

じつは、皇室におかれても、あわや潰れてしまうかもしれないという危機が、一再ならずあった。そんなとき、歴代の天皇は、いったいどんなことを考え、どのようなことをなさったのであろうか。ここでは、とくに順徳天皇という一般になじみの少ない天皇をとり上げ、その事績を中心に紹介しながら、皇室における伝統精神とみられるものをふり返ってみたい。

4 順徳天皇の前半生と志向

順徳天皇は、神武天皇から数えて八十四代目、父は後鳥羽天皇である。後鳥羽天皇には、何人かの皇子がおられた。そのうち、源在子Ⅱ承明門院との間に生まれたのが為仁親王Ⅱ土御門天皇であり、一方、藤原重子Ⅱ修明門院との間に生まれられたのが守成親王Ⅱ順徳天皇にほかならない（次ページの系図参照）。

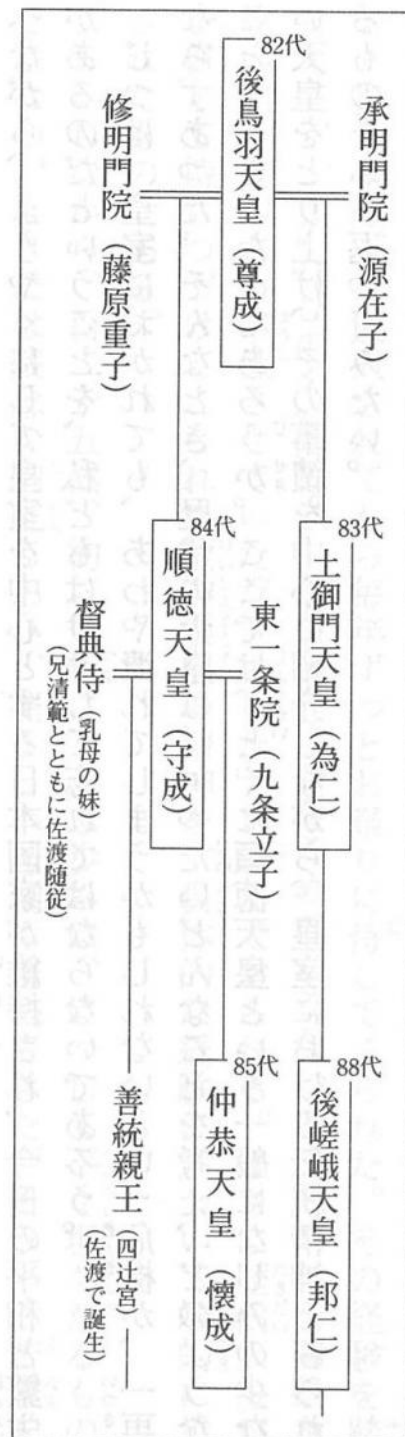
平安時代の中ごろから、天皇は幼少で即位し、だいたい青年期に譲位された方が多く、その後むしろ上皇として活躍された方も少なくない。後鳥羽天皇も、平安末期、



明治7 (1874) 御霊代御還幸

昭和17 (1942) 順徳院700年祭(10月14日)=(新暦命日)

順徳天皇関係略系図



源平合戦の最中にわずか四歳で即位され、十五年後に十九歳で譲位しておられる。その後を継がれた長男の土御門天皇も、同じく四歳で即位、十六歳で譲位された。そこで父の後鳥羽上皇は、ときに十四歳の次男の順徳天皇に第八十四代を継がせられた。それから二十五歳まで、十一年間にわたって在位されている。この順徳天皇のことは、『増鏡』という物語風の歴史書に、つぎのようにしるされている。

この御子（順徳天皇）を、院（後鳥羽上皇）、かぎりなくかなしきものに思ひ聞えさせ給へれば、になくきよらを尽くし、いつくしうもてかしづき奉り給ふ。……御心ばへは新院（土御門上皇）よりも、少しかどめいて、あざやかにぞおはしましける。御ざえもやまともろこしかねて、いとやむごとなくものし給ふ。朝夕の御いとなみは、和歌の道にぞ侍りける。院（後鳥羽）のおぼし構ふる事新院（順徳）は、おなじ御こころにて、よろづ軍の事などもおきて仰せられけり。

すなわち、後鳥羽上皇は次男の順徳天皇を大へんかわいがられ、兄君に継いで即位せしめられた。順徳天皇は性格が明快で、和漢の才を兼ね備え、和歌の道にも優れておられた。しかも、後鳥羽上皇は、朝廷を中心とする本来の政治に戻さねばならないとして、ひそかに倒幕計画を立てられたところ、その計画に順徳天皇も賛同して立ち上がった、というわけである。

この討幕計画を示唆したものとして、後鳥羽上皇のつぎの御歌が注目される。

奥山のおどろの下を 踏み分けて 道ある世ぞと 人に知らせむ

これは、承元二年（一二〇八）、二十九歳のとき、大阪の住吉大社の神前に奉納されたものだといえられている。したがって、心のなかに深く期するところを、率直に表明された御製と理解してよいであろう。

この「道」とは、人の歩くロード（道）だけでなく、人間として踏みべき道、つまり道理・道徳であろう。どんなに困難であっても、本当の道理・道徳がおこなわれる世の中を、なんとかして人びとに知らせたい。ということとは、幕府が政治や経済を壟断し、世の中のあり方、人びとの認識がゆがんでしまった現実を嘆かれ、日本をあるべき姿に戻さなければならぬ、という宿志を示されたのが、この「道ある世ぞと人に知らせむ」という御歌の意味だと思われる。

これに対して、皇子である順徳天皇も、数年後の建保二年（一二二四）、十八歳のとき、つぎのような御歌を詠んでおられる。

奥山の柴の下草 おのづから 道ある世にも 会はむとすらむ

大へんよく似た御歌であって、「道ある世にも会はむとすらむ」とは、まさしく父帝と同様、「道ある世」に再会したいものだ、という志向をあらわしておられる。つまり、これによって順徳天皇も、父君とともに王政復古を実現しようと、深く心に期せられていたことが窺われる。

それから数年後の承久三年（一二二二）、順徳天皇は、皇太子の仲恭天皇に位を譲られ、父の後鳥羽上皇を助けて討幕のために決起された。これが「承久の変」にほかならない。